

1. 生徒数の推移

年	児童数	学級数	教職員	校長名
昭和 22 年	2 0 8 4	3 9		横田 実
23 年	1 1 9 1	2 0		横田 実
24 年	1 2 7 6	2 6		横田 実
25 年	1 2 8 2	2 7	3 0	岡本 義夫
26 年	1 3 1 1	2 7	3 1	岡本 義夫
27 年	1 3 4 5	2 7	3 0	岡本 義夫
28 年	1 3 7 7	2 8	3 4	岡本 義夫
29 年	1 3 3 8	2 6	3 1	岡本 義夫
30 年	1 3 3 9	2 6	3 1	岡本 義夫
31 年	1 4 2 2	2 8	3 3	岡本 義夫
32 年	1 5 1 0	2 9	3 4	岡本 義夫
33 年	1 5 2 9	3 0	3 5	徳下 守親
34 年	1 4 7 0	2 9	3 3	徳下 守親
35 年	1 4 3 5	2 8	3 3	徳下 守親
36 年	1 2 9 5	2 6	3 1	徳下 守親
37 年	1 0 9 7	2 3	2 7	川崎 正守
38 年	1 0 0 2	2 3	2 7	川崎 正守
39 年	7 2 5	1 9	2 2	川崎 正守
40 年	6 8 7	1 7	2 1	川崎 正守
41 年	6 5 1	1 7	2 1	川崎 正守
42 年	6 9 0	1 9	2 3	加藤 政伴
43 年	6 5 9	2 0 (1)		加藤 政伴
44 年	6 3 8	1 9 (1)		加藤 政伴
45 年	6 2 4	1 9 (1)		加藤 政伴
46 年	5 9 7	1 9 (1)		加藤 政伴
47 年	4 1 8	1 4 (特1)	2 0	津田 正吾
48 年	3 5 1	1 3 (特1)	1 9	津田 正吾
49 年	3 1 8	1 2 (特1)	1 7	津田 正吾
50 年	3 9 6	9 (特1)	1 6	津田 正吾
51 年	3 7 4	1 3 (特1)	3 0	成田 徳男
52 年	3 5 1	1 3 (特1)	1 9	成田 徳男
53 年	3 4 9	1 3 (特1)	1 9	成田 徳男
54 年	3 2 7	1 1 (特1)	1 8	森 秀夫
55 年	3 0 6	1 2 (特1)	1 8	森 秀夫
56 年	2 9 2	1 1 (特1)	1 7	紅林 弘昭

57年	270	10(特1)	16	紅林 弘昭
58年	243	8(特1 言語1)	18	紅林 弘昭
59年	218	7(特1 言語2)	16	紅林 弘昭
60年	225	7(特1 言語3)	16	紅林 弘昭
61年	221	6(特1 言語3)	15	後藤 卓摩
62年	189	9(普通6, 特1 言語3)	14	後藤 卓摩
63年	175	9(普通6, 特1 言語3)	14	後藤 卓摩
1年	146	7(普通6 特1)	14	奥山 精一
2年	138	7(普通6 特1)	14	奥山 精一
3年	118	7(普通6 特1)	13	奥山 精一
4年	102	7(普通6 特1)	14	二木 武彦
5年	96	7(普通6、障害1)	13	二木 武彦
6年	88	8(普通6、障害2)	15	安田 隆
7年	76	8(普通6、障害2)	14	安田 隆
8年	77	8(普通6、障害2)	12	安田 隆
9年	73	8(普通6、障害2)	11	石川 昇
10年	65	8(普通6、障害2)	11	石川 昇
11年	55	7(普通6、障害1)	10	佐藤 惠三
12年	51	7(普通6、障害1)	10	佐藤 惠三
13年	48	6(普通5、障害1)	9	森 康伸
14年	41	5	8	森 康伸
15年	38	4	7	森 康伸
16年	30	3	6	順毛 誠一
17年	30	4	7	順毛 誠一
18年	26	4	7	吉田 猛
19年	28	3	6	吉田 猛、 松井 牧子
20年	32	4	7	松井 牧子
21年	25	3	6	松井 牧子
22年	23	3	6	松井 牧子
23年	23	3	6	松井 牧子

3. 歴代校長

		校 長	在 任 期 間
旧	第 1 代	横田 実	昭和 22 年 5 月 1 日 ~ 昭和 27 年 4 月 16 日
	第 2 代	岡本 義夫	昭和 27 年 4 月 16 日 ~ 昭和 33 年 4 月 1 日
	第 3 代	徳下 守親	昭和 33 年 4 月 1 日 ~ 昭和 37 年 4 月 1 日
	第 4 代	川崎 正守	昭和 37 年 4 月 1 日 ~ 昭和 43 年 3 月 31 日
	第 5 代	加藤 政伴	昭和 43 年 4 月 1 日 ~ 昭和 47 年 3 月 31 日
	第 6 代	津田 正吾	昭和 47 年 4 月 1 日 ~ 昭和 48 年 3 月 31 日
新	第 1 代	津田 正吾	昭和 48 年 4 月 1 日 ~ 昭和 51 年 4 月 1 日
	第 2 代	成田 徳男	昭和 51 年 4 月 1 日 ~ 昭和 54 年 4 月 1 日
	第 3 代	森 秀夫	昭和 54 年 4 月 1 日 ~ 昭和 56 年 3 月 31 日
	第 4 代	紅林 弘昭	昭和 56 年 4 月 1 日 ~ 昭和 61 年 3 月 31 日
	第 5 代	後藤 卓摩	昭和 61 年 4 月 1 日 ~ 平成 元年 3 月 31 日
	第 6 代	奥山 精一	平成 元年 4 月 1 日 ~ 平成 3 年 3 月 31 日
	第 7 代	二木 武彦	平成 4 年 4 月 1 日 ~ 平成 6 年 3 月 31 日
	第 8 代	安田 隆	平成 6 年 4 月 1 日 ~ 平成 9 年 3 月 31 日
	第 9 代	石川 昇	平成 9 年 4 月 1 日 ~ 平成 11 年 3 月 31 日
	第 10 代	佐藤 恵三	平成 11 年 4 月 1 日 ~ 平成 13 年 3 月 31 日
	第 11 代	森 康伸	平成 13 年 4 月 1 日 ~ 平成 16 年 3 月 31 日
	第 12 代	順毛 誠一	平成 16 年 4 月 1 日 ~ 平成 18 年 9 月 23 日
	第 13 代	吉田 猛	平成 18 年 4 月 1 日 ~ 平成 19 年 9 月 23 日
	第 14 代	松井 牧子	平成 19 年 11 月 1 日 ~ 平成 23 年 3 月 31 日



学校の歩み〔沿革〕

年 度	月 日	沿 革 概 要
昭和22年		三笠町立幾春別小学校となる 校舎全焼。仮校舎で授業。幾小・幾中啓育会創立。
23年		奔別小学校独立。新校舎起立。
24年		未完成校舎で授業開始。啓育会を幾春別小学校父母と先生の会に改組。
25年		新校舎落成式。校旗、同窓会より寄贈。
29年		非常階段整備。
32年		三笠市立幾春別小学校となる。
34年		児童数減勢に転ずる。
35年		中庭造園コンクリート工事
36年		開校70周年記念式
37年		学校給食開始
39年		西側非常階段設置。児童数激減千人を割る。
40年		東側非常階段設置。
41年		中庭理科教材園設置。給食、学区給食センターに以降
42年		桂沢小学校を併合
43年		家庭科調理室改修。特殊学級開設。
45年		三教研研究指定校〔2年〕となる。校舎全面改装完了。
46年		開校80周年記念式
48年	3月11日	三笠市立奔別小学校閉校
	3月31日	三笠市立幾春別小学校 三笠市立幾春別小学校の分教室設置に関する規則により、次の分教室設置される。 三笠市立幾春別小学校 幾春別分教室 三笠市立幾春別小学校 弥 生分教室
50年	5月31日	前記の規則の効力を失う。
	6月 1日	新校舎完成により移転。
	11月10日	屋内体育館完成。
51年	2月 1日	全校舎完成落成式挙行
54年	2月 6日	三笠市教育権空推進協議会研究指定校中間発表
	7月25日	学校プール落成
	11月20日	三笠市教育研究推進協議会研究指定校研究発表
61年	11月10日	開校10周年記念式典挙行
平成 4年	11月12日	空知管内教育実践表彰を受賞する。
	12月 4日	三笠市教育研究・公開研究（第1次発表）

平成 5年	10月 5日	三笠市教育研究・公開研究（本発表）
平成 6年	2月 28日	幾春別小学校開校20周年協賛会 準備委員会設立総会
		肢体不自由児学級開設
	12月 9日	幾春別小学校開校20周年記念協賛会 設立総会
平成 7年	11月 5日	幾春別小学校開校20周年記念式典挙行
平成12年	6月17日	開庁120周年記念式典（6年参加）
平成17年	5月19日	30周年記念協賛会部会
	7月 8日	30周年記念協賛会部会
	10月30日	30周年記念式典、祝賀会、学芸会
平成18年	1月19日	30周年記念協賛会解散式
	9月29日	全道へき地複式研究大会空知プレ大会
平成19年	9月21日	全道へき地複式研究大会
平成22年	10月21日	タイムカプセル埋設式
	11月 7日	閉校記念式典
平成23年	3月31日	幾春別小学校閉校

開校80周年 記念誌より

1. 悪夢の大火

●幾春別大火

1947年〔昭和22年〕5月16日。この日は、幾春別中学校の開校式が小学校の屋体で行われることになっていました。この日、午前10時20分頃、南区松橋勘次郎方から出た火は、折からの風速20メートルの西南風にあおられて燃え広がり、消防活動中に発火地点から約600メートル離れた市街地中心部数カ所に飛び火してその大部分を焼き尽くしました。火はさらに幾春別炭坑住宅、奔別鉦坂下町住宅、寄宿舎、幾春別小学校、奔別鉦の事務所、病院、川端町、旭が丘などの炭鉦住宅を焼き尽くして周囲の山林にも飛び火、一時は奔別鉦住宅が全滅するかと思われましたが、必死の消化活動で午後3時ようやく鎮火しました。罹災者は幾春別鉦140戸、828人、幾春別市外389戸、1851人、奔別鉦446戸、2402人、合計977戸、5081人。さらに焼死2名、負傷者73名。

幾春別小学校は北校舎への飛び火によって燃えました。発火は、午後0時20分、水利が悪いのと火の周りが早いため、延建坪8793平方メートルの校舎はあっという間に燃え落ちました。焼け残ったのは、今もグラウンドぶちの道路にたっている校門だけ。運び出せた物はわずかに学籍簿などの重要書類だけでした。この大火による小・中学生の罹災は約700名にのぼりました。

●青空教室

小・中学校とも5月22日までは臨時休校となりました。5月22日からは授業が再開されました。雨の日は、劇場、海容寺、坑務所、多寒別会館に分散し、晴れの日には虫に刺されながらの青空教室の授業となりました。仮職員室には、職員住宅1戸と2カ所の天幕が建てられました。8月28日からは、坂下町の奔別鉦員用バラック住宅を借りて、中学校と2部授業、3部授業を行いました。学校にも1番方から3番方までであると苦笑したのですが、裸電灯がぽつんと1つぶら下がっているだけの3番方の授業はわびしい限りでした。9月に入ってからには中学校は唐松春光台寮を仮校舎として一時移転し、汽車通学を行いました。(11月まで) この中でも小学校児童は増え続け、11月には2156名を40学級に編成しました。12月には幾春別炭坑のバラック住宅を改造した仮校舎に、幾春別鉦、市街側の児童20学級、1918名が移転。幾春別中学校も、奔別、幾春別の仮校舎に別れて2部授業を行いました。(岩崎賢治、福永紀子の思い出などによる。)

●奔別小学校の独立

敗戦によってがた落ちになった石炭の生産も当時上昇を始めていました。今度は石炭増産が占領軍による至上命令となったのです。幾春別、奔別両鉦とも、さらに多くの労働者を入れ、増産体制をとる計画が立てられました。そこで町当局では、これを期に幾小を2つに分け、奔別小学校を独立されることを決めました。こうして48年(昭和23年)1月10日、奔別小学校が独立しました。このとき、幾春別小学校は20学級、児童1505名、職員22名、奔別小学校は20学級、児童1103名、職員22名。ほとんど真二つの分割独立でした。

●新しい校舎へ

第46回の卒業式は48年〔昭和23年〕3月、幾春別劇場を借りて行われました。幾小、奔小、それぞれの校舎を新築することを決めたものの、当時の町財政ではどうにもやりくりがつきません。そこで、幾春別炭鉱が幾小校舎を、奔別炭鉱が奔小校舎を、それぞれの“炭住計画”で建て、これを町がかりうける形式をとり、両校の内部設備、工具備品に町が500万円をかけることになりました。幾小新校舎の起工式は48年6月10日。翌49年（昭和24年）7月には未完成の校舎に、26学級、1276名の児童が28名の先生とともに移り、12日から新校舎での授業が開始されました。50年〔昭和25年〕3月には新校舎落成記念式が行われ、新装なった屋体で第48回の卒業式が行われました。この年2月、同窓会から新しい校旗が贈られました。（現在のもの）

●デンプンかすのダンゴ

戦後の食糧事情は戦争中よりもいっそうひどいものでした。特に幾春別では、これに大火が加わったため、想像を絶する苦痛をなめなければなりません。何週間も続いた遅配、欠配。米の代わりに配給されたアメリカのダニ入り砂糖、トウキビ粉。ついにはデンプンかすのダンゴまで食べることになりました。子どもの中には、犬に吠えられてバイクからこぼしていった米粉を拾い集め、おかゆにしてすすった経験を持つものもいます。弁当を持ってこれない子どもたちが非常に多く、昼食の時間は暗い時間となりました。（岩崎賢治の思い出などによる。）

2. 炭鉱の盛衰とともに

●開校60周年

1951年〔昭和26年〕9月1日、開校60周年記念式が行われました。

光まばゆき金門の 扉はここに60年

教えの庭の憩い場所 我が学び舎に開かれぬ

これは、当日歌われた開校60周年記念式歌（横田 実 作詞・作曲）の一説です。

●幾春別炭鉱の閉山

占領軍の至上命令である石炭傾斜生産政策の中でも、三笠全体の出炭量は百万トンに達しませんでした。戦後、百万トンを超えたのは朝鮮戦争が引き起こされた1950年〔昭和25年〕でした。以後、三笠の石炭量は多少のこぼこがありながらも確実に上昇線をたどっていきました。

その中で、幾春別炭鉱は、1950年〔昭和25年〕に11万7千トン余りを出していた物が、1953年（昭和28年）には8万4千トンと大きな減産を示しています。この間、労働者が1042人から653人へと約4割も減らされていることからもうかがわれるように、北炭は幾春別炭鉱に対する「合理化」を強行したのでした。さらに追い打ちをかけるように、北炭は、1953年8月「企業合理化実施要綱」を発表、その中には、幾春別炭鉱の採炭中止・保鉱が含まれていました。この時、北炭は全山で3000名の希望退職を募り、大規模な配置転換を行いました。こうして幾春別炭鉱は、1954年（昭和29年）1月から全く採炭を中止、炭鉱とは名ばかりの保鉱（休山）となったのです。さらに1957年（昭和32年）3月、幾春別炭鉱は閉山と決まり、撤収作業が始まりました。開鉱以来60数年の歴史を持つ幾春別炭鉱はこうして消えました。

●減り始めた児童数

昭和27年度〔1952年〕以降各年度の在籍数は次のように変化していきます。

年 度	年度初在籍数	年 度	年度初在籍数
27	1,308	34	1,470
28	1,376	35	1,435
29	1,338〔幾炭休山〕	36	1,295
30	1,339	37	1,097
31	1,422	38	1,002
32	1,510（幾炭閉山）	39	725
33	1,520	40	667

この一連の数字が非情に物語るように、これまで増える一方で減ることのなかった幾小の児童数も1958年〔昭和33年〕をピークとして減り始めました。父親が配置転換で三笠柏町や幌内住吉町、あるいは新幌内へと移って行くにつれて、また炭鉱をやめて道外へ去る人が増えるにしたがって幾小はだんだんさびしくなりました。そして1964年〔昭和39年〕には一時にがくと減って、ついに1000名台を割ってしまいました。以後、児童数は増えることなく、漸減の一途をたどることとなりました。

●開校70周年

この間、1957年〔昭和32年〕、三笠に市制がしかれ、幾小は三笠市立幾春別小学校となりました。さらに、1961年（昭和36年）9月1日には開校70周年記念式が行われました。70周年記念協賛会（前だ武雄会長）の手によって、中庭造園、図書館改造、16ミリ映写機の購入なども行われました。空教室が増え、だんだん寂しくなっていく中で、子どもたちを喜ばせたものは、給食の開始でした。1962年〔昭和37年〕には給食室が新設され、12月から給食が開始されました。〔学校給食センターに切り替わったのは1966年〔昭和41年〕から。〕

3. 揺れ動く奔別鉱

●炭鉱「合理化」の進行

炭鉱の「合理化」、閉山は決して幾春別炭鉱だけのことではありませんでした。1960年（昭和35年）当時120鉱をこえていた空知の炭鉱は、現在では20数鉱となりました。炭鉱労働者の数も3分の1程度になっています。

三笠市の人口の推移も炭鉱の「合理化」、閉山の後をはっきりと示しています。1960年〔昭和35年〕10月1日の国勢調査のとき、三笠市の人口は56196人。そして1970年〔昭和35年〕10月1日の国勢調査では、40553人。10年間で実に15643人、27.8%の人口が減ったのです。この大部分は炭鉱労働者とその家族です。

● 奔別炭鉱の分離

奔別炭鉱を住友鉱業から分離し、この9月1日から奔別炭鉱株式会社という別会社として新発足させるという「合理化」も、このような石炭産業「合理化」の一環です。今年3月以来、奔別炭鉱は、分離か閉山かを巡って大揺れにゆれました。それは、ひとり奔別炭鉱だけの問題ではなく、幾春別炭鉱を失った幾春別の関連企業、商工業者にとって奔別炭鉱の存廃はまさに死活の問題でした。三笠市としても重大問題でした。

● 開校80周年

1971年、幾春別小学校は開校80周年記念式をあげることになりました。私立幾春別小学校として発足した1890年〔明治23年〕9月1日から数えれば81周年、4年制の私立小学校となった1891年から数えれば満80年。その80年は、炭鉱とともに生まれ、炭鉱とともに成長してきた80年でした。学校が地域とともに在るものであることをいまさらのように痛感せざるをえません。

